

## 「探究」の道のりにあるあいまいさに向き合う

校長 森 和 久



先日、海部津島青年会議所様の主催で、元中日ドラゴンズの立浪和義氏及び日本人初のプログラマーの梅原大吾氏といっしょにパネルディスカッションをさせていただきました。「探究する力」を主たる話題とした協議でしたが、参加させていただき考えたことを述べさせていただきます。

「探究」とは、ある課題を深く追究し続けることによって、物事の意義・本質などを探って見きわめようとするので、突き詰めても突き詰めても果てのない道を歩む、まさに人生そのもの、生きることそのものと言ってもよいと思います。「いかに生きるか」という答えのない命題を試行錯誤しながら深く追究し続けて、よりよい人生を送ること。つまり自分が幸せになるとともに周りや世の中を少しでもよくすること。こうした道のりを歩むことが、広い意味での「探究」だと思います。

学校教育の中では、「習得・活用・探究」という学習の流れで、「探究」する学習が示されています。まず、基礎的・基本的な知識・技能を「習得」し、それを「活用」する学習活動を行う。そうして活用できるようになった「知識、技能」や「思考力、判断力、表現力等」を駆使して、総合的な学習の時間等において自ら設定したテーマについて「探究」する活動を行うというものです。この学校教育における、いわば狭い意味の「探究」は、人生における「探究」(広い意味での「探究」)ができるようになるための練習と位置づけられると考えます。

パネルディスカッションでの、立浪氏、梅原氏のお話に共通する点は、お二人とも、自分と向き合い、とことん「試行錯誤」されていること、そしてその結果を振り返り、それを「言語化」して記録されていることです。野球、ゲームと分野は違いますが、上達するための方策

を探究し続けられていて、学校教育における「探究」にも通じる内容だと感じ入った次第です。

立浪氏は、早くから自分の探究すべき「野球」という道を見いだされましたが、梅原氏は、今の道を見つけるまで試行錯誤されました。この通信でも何度か触れていますが、この「課題発見」はなかなか難しいことです。学校教育における「探究課題」でも決めることが難しいので、ましてや自分の進むべき道はそんなに簡単に見つかるものではありません。

けれども「課題発見」も試行錯誤だと思います。すんなりと見つからなくてもあせることはありません。別の言い方をすれば、何にでも探究すべき道はあるので、あまり決めつける必要もないと思います。「自分が本当にやりたいことを課題としなければいけない」とか「自分の道はかくあらねばならない」、「この道で失敗したらもうだめだ」と決めつけるのではなく、とりあえず目の前にあることに、できるだけ楽しみを見いだしながら、主体的に、試行錯誤して取り組むことが、人生の「探究」に通じているかもしれないと考えることも大事なのではないのでしょうか。

答えのない課題を突き詰め続けることが探究だとするならば、はっきりしない状態、あいまいな状態は当たり前のことだと受け入れることは重要です。あいまいな状態は不安ですが、不安に対する粘り強さが「探究」の鍵となるのではないかと思います。

12月の月目標は、「周りのことも考えよう」です。自分を大切に、周りも大切にすることをおねがいしていますが、とりわけ今の状況下では、周りのことを考えても、すっきりとした正解が見つからないことも多いでしょう。このあいまいさを受け入れることもとても大切なことなのかなと思っています。

